

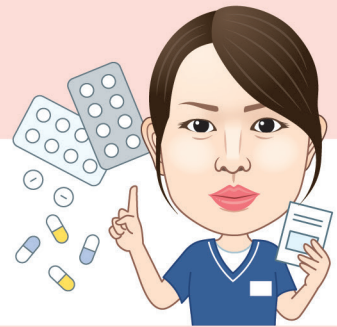


入院中に多職種で行う栄養管理： 栄養サポートチーム Nutrition Support Team: NST

抗コリン作用と栄養障害

薬と栄養には深い関係があります。今回はその中でも、薬の「抗コリン作用」についてお伝えします。

サルコペニア
低栄養研究センター
薬剤師
まつもと あやか
松本 彩加



抗コリン作用とは、体内でアセチルコリンという神経伝達物質の働きを抑え、副交感神経の働き(図1)を抑制する作用のことを指します。このアセチルコリンは、全身のさまざまな臓器に影響を与えるため、抗コリン作用を持つ薬は多くの身体機能に影響を与える可能性があります。

抗コリン作用を治療の目的として用いる例として、過活動膀胱や胃痛、腹痛の治療薬があります。しかし、この作用が副作用として現れる場合もあり、特に以下のような症状は栄養状態に悪影響を与える可能性があります。

- 唾液の分泌が減り、口が乾燥することで食べ物を飲み込みにくなる
- 消化管の動きが低下して食欲が減少する、また便秘になりやすくなる
- 眠気や認知機能の低下により、食事に集中できなくなる

抗コリン作用は総合感冒薬や抗アレルギー薬の一部、抗うつ薬、抗精神病薬など、さまざまな薬に含まれています。特に高齢者は、複数の病気を抱え、同時に複数の薬を処方されているポリファーマシーであることが多く、抗コリン作用による副作用が出やすくなります。

そのため、抗コリン作用の強さを数値化し、リスクを評価するための「**抗コリンリスクスケール**」というツールが開発されています。日本でも今年、日本老年薬学会が日本版抗コリンリスクスケールを発表し、高齢者に対する抗コリン作用の影響を評価することが推奨されています(図2)。

抗コリン作用のある薬を服用している場合は、食事の様子や体重の変化に注意し、必要に応じて薬の調整や栄養サポートを受けることで、栄養状態の維持や改善が期待できます。

図1 副交感神経のはたらき

抗コリン作用をもつ薬は、これらの働きが抑制されることがあります。

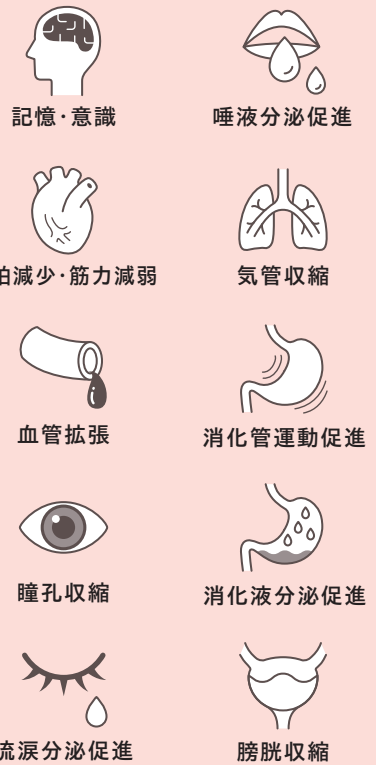
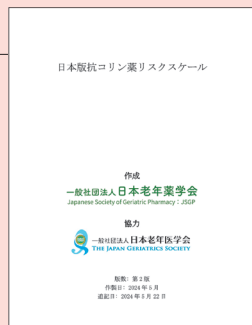


図2 日本版抗コリンリスクスケール

筆者也ワーキンググループメンバーとして貢献しました。



日本老年薬学会が日本版抗コリン薬リスクスケールをWEBで公開されています。



作成者一覧

一般社団法人日本老年薬学会 日本版抗コリン薬リスクスケール作成ワーキンググループ

氏名	所属施設
代表 秋下 雅弘	東京都健康長寿医療センター
新井 さやか	千葉大学医学部附属病院薬剤部
亀井 美和子	帝京平成大学薬学部
小島 太郎	東京大学大学院医学系研究科加齢医学講座老年化制御学
阪井 丘芳	大阪大学大学院歯学研究科顎口腔機能治療学講座
柴田 ゆうか	広島大学病院薬剤部
田口 怜奈	一般財団法人医療経済研究・社会保険福祉協会医療経済研究機構
竹屋 泰	大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻老年看護学教室
那須 いずみ	フラットアイアンヘルス株式会社
東 敬一郎	医療法人社団浅ノ川浅ノ川総合病院薬剤部
松本 彩加	熊本リハビリテーション病院サルコペニア低栄養研究センター
水野 智博	藤田医科大学医学部薬物治療学
幹事 溝神 文博	国立長寿医療研究センター薬剤部
茂木 正樹	愛媛大学大学院医学系研究科薬理学
山田 静雄	静岡県立大学大学院薬学研究院薬食研究推進センター

(五十音順)